

「あがる・さがる」の意味拡張とその非対称性

—上下メタファーによる内省分析法の確立をめざして—

森 山 新

1. はじめに

基本動詞は言語使用において重要であるが、多くは多義性が高いため習得が難しい。多義語を含め語彙の習得には辞書が重要となるが、その際問題となるのがその多義の記述である。従来多義語の意味分析は専門家の内省に委ねられることが多かったが、分析結果が専門家間で一致しないことも多かった(森山、2015)。認知言語学では、脳内に形成される心的表象としての意味構造は言語話者の言語使用が反映すると考えている。各言語話者の言語使用が完全に一致するはずがない(Langacker, 2008)以上、意味構造が専門家間で一致しないのは当然のことである。しかし上述した内省分析に見られる不一致は、その分析法や記述法などの不備によるものも少なくなく、それを改善することで、ある程度見解の一致を見ることができるのではないと思われる。

また、多義語の意味構造の記述が辞書間で異なっているのは利用者に混乱を引き起こしかねない。とりわけその言語を母語としない第二言語学習者にとってはなおさらで、その言語共同体で共有される意味構造の典型を提示することは有益であろう。

こうしたことから近年、心理実験など、不特定多数の母語話者の言語使用を反映させた意味構造の解明が行われている(森山、2015)。しかしここでは、心理実験にも短所があることも示され、両手法ともに信頼性を高めることが求められている。心理実験の方は、その後の研究で改善方案が示されつつあるため、本稿では、内省分析法の確立の方に焦点を絞った。本稿では「あがる・さがる」を取り上げるが、その理由は、これらが上下移動という日常生活の中で最も基本的な出来事の1つを表す基本動詞であることや、研究間に様々な不一致が見られ、内省分析法を確立するのにふさわしいと考えたためである。また本稿が「上下メタファー」の考え方(後述)を用いたのは、この考え方が一見無秩序に思える日常の意味拡張の営みに、言語を超えた普遍的な秩序のみならず、その言語ならではの動機づけをも説明しうるものであり、上下移動などの意味構造分析を体系的に行う上で有効であり、かつそれは「上下」だけでなく、「内外」「前後」などの「方向性のメタファー」に関係する、他の動詞の内省分析法の確立にもつながると考えたためである。

Taylor (2003: 103) は、多義性には複数のドメインにまたがる多義性と、同じドメイン内で生じる多義性があるとしている。本稿で扱う「あがる・さがる」は「空間から非空間へ」と様々なドメインへ拡張して生じた多義性と、「空間」のドメイン内で生じる多義性とを有しており、その点でも多義語の例として挙げるにふさわしい。また以下で述べるように上述の「上下メタファー」の観点は、「空間から非空間へ」の意味拡張を分析する理論的枠組みとしても有効であると考えた。

認知言語学の観点から動詞の意味構造を分析するにあたっては、「中心義の決定」「拡張義の分類」、そして拡張義が中心義からどのような動機づけで拡張しているかという「意味拡張」の3点を明らかにする必要がある（瀬戸、2007: 46-47）が、紙面の制約から本稿ではこのうち今まであまり行われなかった3番目の「意味拡張」に焦点を絞ることにする。

2. 先行研究

本稿で用いる理論的枠組みはLakoff and Johnson (1980) の「概念メタファー」である。Lakoff and Johnson (1980, 邦訳版p.3) によれば、我々の日々の営みにおける「概念体系の大部分はメタファーによって成り立っている」とし、このメタファーが我々の日々の営みに構造を与えているとした。例えば《ARGUMENT IS WAR》は「議論」を「戦争」という概念を用いて構造を与え、理解していることを示している。また意味拡張の側面から言えば、「戦争」の語を用いて、「議論」の事態を表現しており、「戦争」領域から「議論」領域へと意味が拡張したと考えられる。

Lakoff and Johnsonによれば、概念メタファーには、「構造のメタファー」「方向づけのメタファー」「存在のメタファー」があるという。本稿で扱う「あがる・さがる」は「方向づけのメタファー」の1つ「上下メタファー」に関係し、「本来は非空間的な経験を「上下」などの位置関係として概念化する」ものである。「方向づけのメタファー」には「上下」の他、「内外」「前後」「着離」「深浅」などが含まれる。

Lakoff and Johnsonは、英語における「上下メタファー」には(1)のようなものがあるとしている。

- (1) ① HAPPY IS UP; SAD IS DOWN
② CONSCIOUS IS UP; UNCONSCIOUS IS DOWN
③ HEALTH AND LIFE ARE UP; SICKNESS AND DEATH ARE DOWN
④ HAVING CONTROL or FORCE IS UP; BEING SUBJECT TO CONTROL or FORCE IS DOWN
⑤ MORE IS UP; LESS IS DOWN
⑥ FORESEEABLE FUTURE EVENTS ARE UP (and AHEAD)
⑦ HIGH STATUS IS UP; LOW STATUS IS DOWN
⑧ GOOD IS UP; BAD IS DOWN
⑨ VIRTUE IS UP; DEPRAVITY IS DOWN
⑩ RATIONAL IS UP; EMOTIONAL IS DOWN

このように「上下メタファー」とは「空間的な上下を表す語」で「非空間的な経験」が表されるような概念化を指す。

一方、Taylor (2003: 136-139) は、英語 high を例に「上下メタファー」のカテゴリ化を行い、(2)のように「数量」「評価」「支配」に分類している。

- (2) ① 数量 (domains of quantity: 《MORE IS UP; LESS IS DOWN》)
high number/temperature/price/speed/blood pressure/pulse rate
② 評価 (domains of evaluation: 《GOOD IS UP; BAD IS DOWN》)
high standard/quality/opinion/moral values/hopes/expectations/
spirits/life/junks
③ 支配 (domains of control: 《POWER IS UP; POWERLESSNESS IS DOWN》)
high society/class/-born/status/command/priest/position

「数量」とはある数量の尺度上に位置付けられるもので、「程度」「強度」なども含まれる。「評価」とはhighが肯定的評価を伴うもので、感情、健康などの肯定的評価（喜び、生气）も含まれる。「支配」は社会的な力関係に関連するものである。但し「精度」「複雑度」などが「数量」と「評価」のいずれにも関わっているように、これらは必ずしも明確に区別できないとも述べている。また「評価」ではhigh handedのように、highが否定的に評価される例も存在している。「上下」には位置、力（引力）が関わり、位置は「数量」やそれに対する認知主体の「評価」が伴うことが多く、力は「支配」を生じるため、非空間的用法を「数量」「評価」「支配」に分けたことは妥当であろう。しかしこれはhighに対する分析であり、他の語ではこれ以外のカテゴリが加わる可能性がある。

日本語の「上下メタファー」について研究しているものに鐘・井上(2013)がある。鐘・井上は『朝日新聞』の記事データベースから用例を収集し、日本語の上下メタファーの詳細な分析を行っている。その結果、(3)のように6つに分類し、さらに22の下位カテゴリに分けている。《 》は上下メタファーの種類を、「 」は具体例を示す。

(3) 数量：《量が多いことは上、量が少ないことは下》「値上がり」

時間：《早い時間は上、遅い時間は下》「繰り上げ償還」

順序：《内容が前であることは上、内容が後ろであることは下》「上旬」

属性：(1) 物理的属性；

《音響が高いことは上、音響が低いことは下》「声のトーンを上げた」

(2) 社会文化的属性；

《社会的等級が高いことは上、社会的等級が低いことは下》「上司」

《人徳・気品が高いことは上、人徳・気品が低いことは下》「上品さ」

状態：(1) 生理的状态；

《健康な状態は上、病的な状態は下》「体調も上向き」

《生の状態は上、死の状態は下》「起死回生」

(2) 心理的状态；

《意識がある状態は上、意識がない状態は下》「早起き」

《楽しい状態は上、悲しい状態は下》「悲しみの底からはい上がる」

《尊大な状態は上、謙虚な状態は下》「孤高」

《感情的状態は上、理性的状態は下》「にぎやかにつき上がる」

(3) 事件の状态；

《公的状态は上、私的状态は下》「上演」

《まとまった状態は上》「全力を挙げて」

《未知状態は上、既知状態は下》「浮動票」

《完了状態は上、完了前の状態は下》「焼き上がった魚」

《影響される状態は下》「戦時下の学校生活」

《支配される状態は下》「植民地支配下」

《正しく機能する状態は上、正しく機能しない状態は下》「事務局の立ち上げ」

《知覚できる状態は上、知覚できない状態は下》「批判が上がった」

《知覚できる状態は下》「災害が降りかかる」

評価：《良いことは上、悪いことは下》「市民サービスの向上」

鐘・井上はコーパスに基づき、日本語の上下メタファーの分布を広範に調べ、その言語の普遍性と個別性を明らかにしている点で評価に価するものの、カテゴリの分け方についていくつか問題を抱えている。例えば「属性」はLakoff and JohnsonにもTaylorにもないカテゴリである。この「属性」は「物理的属性」と「社会的属性」からなっているが、Taylorによれば前者は「数量」、後者は「支配」に属しており、これらをまとめて「属性」とすべきか疑問である。また「状態」もLakoff and JohnsonやTaylorにない。そして「状態」は「生理的状态」「心理的状态」「事件の状態」からなるが、Taylorによれば、このうち「生理的状态」「心理的状态」は「評価」に、「事件の状態」の「影響される状態」「支配される状態」は「支配」に含まれている。第二に用例の配属にも問題がある。例えば《感情的状態は上、理性的な状態は下》に属する「にぎやかにつき上がる」は「いよいよ米を臼に入れ、息子夫婦がつく。景気の良いきねの音、にぎやかにつき上がる」(2011年12月14日朝刊)のような文脈で用いられ、《感情的状態は上、理性的な状態は下》ではなく、「焼き上がった魚」同様、《完了状態は上、完了前の状態は下》に含まれるものであろう。

「あがる・さがる」の意味構造について分析した先行研究には、柴田・国広・長嶋・山田(1976)、長嶋(1983a, b)、森田(1989)、太田(2008)などがある。

柴田他(1976)では「あがる・さがる」の対応関係に触れており、「あがる・のぼる」に「さがる・おちる・おちる・くだる」の反意語があるとしている。また「あがる」と「のぼる」を比較し、空間的用法では「あがる」が「到達点に焦点を合わせる」のに対し、「のぼる」は「経路に焦点を合わせる」と述べている。さらに「あがる」は、「広い意味での空間的移動」では「大雨で川の水面があがった」のような「始めの状態(基点)を離れることを表す」用法、「慣用語法(本稿のメタファー的拡張用法に相当)」では「学校にあがった」「雨があがった」のような「非連続的移行を表す。完了を示す」用法があるとしている。さらに「あがる・のぼる」は「上への移動」を表し、その結果「顕在化」する用法がある点で共通しているとしている。

一方「さがる」については「おちる」と比較し、「遮断機がさがった/おりた」のように「さがる」は「基点が焦点となり、そこからの移動」が示されるが、「おちる」は「何らかの到達点に焦点が置かれ、そこまでの移動」が示されるとしている。

また「あがる・さがる」を比較し、「あがる」が「始めの状態(基点)を離れる」用法と「到達点に焦点を合わせる」用法があるのに対し、「さがる」は「基点が焦点となり、そこからの移動」を表すと述べ、使用の非対称性に言及している。

長嶋(1983a, b)も基本的に柴田他(1976)を引き継いでいるが、「あがる」の「完了」用法は「到達点に焦点」の用法が比喩的に転用された用法であるとしている点、「さがる」は「あがる」とは異なり「基点を離れ」て移動する水平移動の用法があるとしている点が補足されている。

森田(1989)では「あがる・さがる」は上下間の段階的移動、「あがる・おちる」は上下両極間での位置移動であるとしている。また「あがる・さがる」は垂直移動だけでなく、水平移動にも転用されるとし、「先生のお宅へ上がる」「宿にさがる」など、「上位者側」対「自己(下位者)」間の位置移動の例を挙げている。

太田(2008)は認知意味論の観点から「あがる・のぼる・おちる・さがる・くだる・おちる」の意味分析を行っている。ここでは「あがる」には(4)のように、「さがる」に対応する別義2だけでなく「おちる」に対応する別義1があるとし、「あがる・さがる」の使用の非対称性を指摘している。

(4) 別義1: <物体が> (<対比される上下の領域があつて>) <上の領域から> <下の領域に> <移動する>

{二階/台}にあがる。{階段/坂}をあがる。{遮断機/手}があがる。

別義2：〈物体が〉〈基点となる位置から〉〈上方に〉〈移動する〉

(バレエで) 足が高くあがる。(走り方で) 足があがっていない。(四十肩で) 腕があがらない。川の水位があがる。{引いた線/貼ったポスター}は右があがっている。

また「完了」「顕在化」などは別義1から、数値化された様々な変化は別義2から拡張したとしている。一方「さがる」は別義2のみに対応するとしている(5参照)。

(5) 〈物体が〉〈基点となる位置から〉〈(垂れて) 下方に〉〈移動する〉

川の水位がさがる。{引いた線/貼ったポスター}は右がさがっている。まぶたがさがる。垂れ幕がさがる。

しかしながら、これら先行研究は主に作例を用い、用例が網羅的でなかったり(柴田他、1976; 長嶋、1983a, b; 森田、1989; 瀬戸、1995; 太田、2008)、意味拡張の分析で「上下メタファー」の概念を用いていなかったり(柴田他、1976; 長嶋、1983a, b; 森田、1989; 太田、2008)している。さらにいくつかの先行研究では、「あがる・さがる」の使用の非対称性について言及があるが(例えば柴田他、1976)、用例を網羅的に集めた上で非対称性の分布について体系的に分析したものとはなっておらず、使用の非対称性の原因についての詳細な考察も行われていない。

「上下メタファー」の概念を用い、かつコーパスを使って用例を網羅的に分析しているものに森山(2016)がある。森山では「上下メタファー」に基づいた鐘・井上の枠組みを用い、「あがる」の意味拡張について明らかにしている。また「あがる」の用例を網羅的に集めるため、NINJAL-LWP for BCCWJ(国立国語研究所とLago言語研究所が開発)を用いている。「上がる」8162文、「あがる」2327文、「揚がる」177文が検索されたため、これらを対象とし、鐘・井上の各分類に合致する例を抽出した。鐘・井上の枠組みに収まらない場合には新しいカテゴリを加えている。その結果、表1のような結果になった。

しかし森山(2016)は「あがる」のみが扱われ、「さがる」の意味構造や「あがる・さがる」の使用の非対称性には触れていない。また、鐘・井上の枠組みをそのまま継承しているため、分類に鐘・井上と同様の問題を抱えており、カテゴリの再構築を行う必要がある。

これら先行研究の残された課題を補完すべく、本稿では「上下メタファー」の理論的枠組みとコーパスに基づく網羅的な使用データを用いて「あがる・さがる」の意味拡張を明らかにし、かつそれらの使用の非対称性とその原因を明らかにする。またその結果を参考に、内省分析法の確立をめざす。本稿の研究課題は以下の通りである。

- 1 「あがる・さがる」の意味拡張はどのようなものか。
- 2 「あがる・さがる」の意味拡張は非対称か。
 - 2-1 使用に非対称性が見られる場合、それはどのような部分か。
 - 2-2 使用に非対称性が見られる場合、それはなぜか。

表1 「あがる」の意味拡張

カテゴリー	下位カテゴリー	起点>目標	例文
0 空間	空間		煙が、頭が、火花が、手が、幕が、水位が、額が、あごが、右手が、肩が
	家屋	0a 上>家の中	客が、家に、縁側に、居間に、室内に
	食卓	0b 上>食卓の上	食卓に
	水陸	0c 上>陸	水死体が、魚が、ウミガメが、ボートが、兵が、岸に、島に、風呂から、海から
	活動空間	0d 上>活動の場	マウンドに、リングに、土俵に、教壇に
	地球(北半球)	0e 上>北	緯度が、台風が、北に
	攻撃的空間	0f 上>前	最前線が、ボランチが、サイドを
1 時間	時間	1 上>早	—
2 数量	数量	2 上>多	気温が、湿度が、値が、値段が、率が、価格が、株価が、血圧が、体温が、金利が、数が、量が
3 順序	前後	3a 上>前	順位が
	新旧	3b 上>新	バージョンが
4 属性	物理的	4a 上>高音調	音が、語尾が、トーンが
	社会的	4b 上>社会的等級高	(昇級) 地位が、学年が、クラスが、ステータスが、ポジションが、学校に、中学に、年長に、軍に、一軍に 〈尊敬〉座敷に、お迎えに、屋敷に、御所に、アイスクリームを
		4c 上>上品	品が
5 状態	生理的	5a 上>健康	コンディションが
		5b 上>意識	意識が
		5c 上>楽	テンションが、ボルテージが、気分が、意気が、士気が
		5d 上>感情的	試験場で、人前で
	事件	5e 上>公的	動画が、ネットに、サイトに
		5f 上>終了	雨が、梅雨が
		5g 上>機能停止	息が、バッテリーが
		5h 上>完成1	写真が、原稿が、ネガが
		5i 上>完成2	トンカツが
		5j 上>視覚可	煙が、火の手が、炎が
		5k 上>聴覚可	歓声が、悲鳴が、叫び声が、笑い声が、銃声が、叫びが、音が
		5l 上>意見出現	声が、要望が
		5m 上>情報出現	話が、名が、名前が、報告が、名声が、問題が、候補が、例が、犯人が、情報が、【人名】が
		5n 上>利益出現	収益が、利益が、業績が、売り上げが、実績が、収入が
6 評価	評価	6上 >良	効果が、成果が、成績が、効率が、価値が、評価が、実効が、ランキングが、運が、知名度が、人気、相場が、質が、待遇が

3. 研究方法

まずはLakoff and Johnson、Taylorをもとに、鐘・井上の枠組みの再構築を行う。その上で「あがる」の意味拡張を分析した森山(2016)を修正する。さらに森山と同様の手法を用い「さがる」の用例を網羅的に集め、意味拡張を分析し、使用の非対称性とその原因について考察する。

用例は、森山にならない、NINJAL-LWP for BCCWJで検索して収集した。「さがる」で検索した結果、漢字を用いた「下がる」では4074文がヒットし、漢字を用いない「さがる」は存在しなかったため、漢字を用いた4074の例文を研究対象とし、「あがる」と比べつつ、各分類に合致する例を収集した。分類に際しては、「上下メタファー」とその結果としてのカテゴリ記述を中心に記述し、前者は《 》で示した。

4. 研究結果

4.1. 意味構造分析の枠組み

まずTaylorを参考に、(1)のLakoff and Johnsonの上下メタファーを分類する。「数量」には⑤、「評価」には⑧⑨⑩の他、感情に対する評価の①、意識に対する評価の②、健康に対する評価の③が含まれよう。

「支配」には④⑦が含まれよう。一方、これら3つに含められないのが「時間」に関する⑥である。一般に「時間」は《時間は空間である》というメタファーに基づき、「空間」からの拡張と考えられることが多いため、これら3つとは別に「空間」から拡張したと考える(⑥参照)。

(6) 空間→時間：⑥

→数量：⑤

→評価：⑧⑨⑩→①②③

→支配：④⑦

次に(6)を参考に、鐘・井上の結果を再分類してみる。まず「数量」「時間」「評価」は各々「数量」「時間」「評価」に属することは異論がないであろう。「順序」とは《内容が前であることは上、内容が後ろであることは下》で「上旬」「上巻」などが例に挙げられている。これらでは上下が順序尺度を表し、「数量」に含めることもできそうである。しかしこれらでは下より上の方が小さく、《量が多いことは上、量が少ないことは下》となっている他の「数量」とは逆である。そのため「順序」は「数量」に含めるものの、別の下位カテゴリとする。次に「属性」であるが、音、トーンなどの「物理的属性」は数量的尺度で示されるため「数量」に、社会的等級や待遇などの「社会的属性」は「支配」に含めた。「状態」のうち「生理的状态」「心理的状态」はTaylorに基づき「評価」に含めた。「事件の状態」には様々なメタファーが分類されているが、《影響される状態は下》《支配される状態は下》は「支配」に属するであろう。また《公的状态は上、私的状态は下》《知覚できる状態は上、知覚できない状態は下》《知覚できる状態は下》は認知主体の知覚的空間への「出現」を表すことから、主観的な空間であるため「出現」を新設する。《完了状態は上、完了前の状態は下》《正しく機能する状態は上、正しく機能しない状態は下》は数量・状態的变化の末に何か「完了・完成」したものであるため、「数量」と以下の「評価」の両方に関わるカテゴリとして「完了」を新設した。但し《まとまった状態は上》《未知状態は上、既知状態は下》は再考の余地がある。前者の「全力を挙げて」「国を挙げて」の「あがる」は『大辞林』によれば「出し尽くす」という意味で「完遂」に近く、《まとまった状態は上》の例であるとは考え難く、本稿では「完了」に含めた。後者の「浮動票」「落ち着く」は「未知・既知」よりは心理的状态の安定性を上下メタファーで表していると考えられ、以下の「評価」に含める。

「評価」には「評価」「生理的状态」「心理的状态」が含まれる。以上をまとめると拡張義は「出現」「時間」「数量」「評価」「完了」「支配」に分類される。本稿ではこの枠組みを用いて意味拡張を分類する。

4.2. 研究課題1

結果、「あがる・さがる」の意味拡張は以下ようになった。

4.2.1. 時間

時間から上下へのメタファーは「さがる」でのみ(7)のような例文が見出された。これは時間の流れが「過去から現在へ」と一方向であり、同様に物の落下も「上から下へ」と一方向であることから「過去=上、現在=下」といった関係づけがなされとらえたためであると考えられる。

(7) さがる：時代が

4.2.2. 数量

《量が多いことは上、量が少ないことは下》のメタファーは(8)のように様々な例文が見受けられた。(9)は鐘・井上、森山では《音響が高いことは上、音響が低いことは下》というメタファーに基づき「物理的属性」としていたものであるが、本稿では「数量」に含めた。

- (8) あがる：気温／湿度／値／値段／率／価格／株価／血圧／体温／金利／数／量が
さがる：気温／値／値段／率／価格／株価／血圧／金利／温度／熱が
- (9) あがる：音／トーン／語尾が さがる：音／トーン／声

4.2.3. 評価

4.2.3.1. 評価

《良いことは上、悪いことは下》では(10)のようなものが見られた。一方、(11)のような《人徳・気品が高いことは上、人徳・気品が低いことは下》については、本稿では「評価」に含めた。

- (10) あがる：効果／成果／成績／効率／価値／評価／実効／運／知名度／人気／相場／質／待遇が
さがる：成績／価値／評価／人気／質／ランク／格／能率／値打ち／評判が
- (11) あがる：品が さがる：品格が

さらに上述したように、森山では鐘・井上の枠組みに従って「順序」というカテゴリを設け、(12)は《内容が前であることは上、内容が後ろであることは下》のメタファーにより「前後」、(13)は《新しいものは上、古いものは下》のメタファーにより「新旧」であるとして、どちらもこの「順序」に含められていた。しかしこれらは「評価」が良くなることが「あがる」で示されており、《良いことは上、悪いことは下》の用例と考えることができる。(13)では「さがる」は見出されなかった。これはバージョンが悪くなることは通常起こらないためであろう。

- (12) あがる：順位が さがる：順位が
- (13) あがる：バージョンが

4.2.3.2. 健康

《健康な状態は上、病的な状態は下》には(14)の用例が該当する。

- (14) あがる：コンディションが さがる：調子／代謝／免疫が

4.2.3.3. 意識・感情

《意識がある状態は上、意識がない状態は下》《楽しい状態は上、悲しい状態は下》《感情的状態は上、理性的状態は下》には各々(15)(16)(17)が該当すると思われる。「さがる」では(15)(17)は見出されなかった。ただ(15)の場合「意識がさがる」はコーパスでは検索されなかったものの、広く用いられており、実際「意識が下がる」でgoogle検索しても37,700件ヒットする(2016/10/20検索結果)。しかし(17)の場合「さがる」は用いられない。ここで「あがる」は「緊張する」という意味であるが、その逆、即ち「緊張が解かれる」ことは起こりうるものの、それを「さがる」では表すことは少ないためである。また通常、「あがる」ことは「良いこと」と評価されるが、(17)はむしろ平常心を失うことであり、「悪いこと」として評価されていることも特徴である。これは鐘・井上の「浮動票」「落ち着く」と同様である。

- (15) あがる：意識が
- (16) あがる：テンション／ボルテージ／気分／意気／士気が
さがる：テンション／モチベーション／意欲が
- (17) あがる：試験場／人前で

4.2.4. 支配

「支配」には、まず、鐘・井上で「属性」に含めていた《社会的等級が高いことは上、社会的等級が低いことは下》が含まれる。(18)は学年・階級自体が主語になるもの、(19)は人が主語になるものである。さらに(20)のような被支配者の支配者へ近づく移動が「あがる」、離れる移動が「さがる」で表される用例が含まれる。これらでは空間移動が含まれるため、「支配」とともに以下で述べる「空間」の「前後」にも関

係している。このほか(21)のように尊敬語「あがる」の用例もある。「さがる」では(19)(21)に該当する用例が見出されなかった。(19)は進学・進級自体が一方向的であること、即ち同じ状態にとどまる「留年」はあっても、「退年」は通常起こらないためであろう。(21)の尊敬語の「あがる」でも非対称的である。

- (18) あがる：地位／学年／クラス／ステータス／ポジション／学歴が
さがる：地位／序列／地位が
- (19) あがる：小学校／四年生に
- (20) あがる：座敷／お迎え／屋敷／御所に さがる：メイド／執事／女中が
- (21) あがる：アイスクリームを

4.2.5. 出現

鐘・井上、森山で「事件の状態」に分類されていたものには「出現」に区分されるものと、「数量」に「評価」が融合した「完了」に区分されるものがある。「出現」には、公的な場や人前に出現する(22)のような《公的状态は上、私的状态は下》による用例が含まれる。「あがる」では「アップロードされ、人々の目に触れるようになる」という意味で用いられる例文が見出されたものの、「さがる」では用例がなかった。それは「ダウンロード」されたり、「ネット上などから削除され、人々の目に触れなくなる」ことは慣習的に「さがる」で表さないことによる。《知覚できる状態は上、知覚できない状態は下》では、(23)視覚的出現、(24)聴覚的出現、(25)意見の出現、(26)情報の出現などが「あがる」で表されうが、「知覚できない状態になること」は「さがる」で表せない。森山では(27)のような用例は「利益等の出現」としている。しかし、これらは《量が多いことは上、量が少ないことは下》という「数量」の増加・減少の意味を持ち「数量」のカテゴリにも含めることが可能である。但し「あがる」では、「利益があがる」が「利益が増える」という意味ではなく「利益が出る」という意味で用いられることがあり、この場合には「数量の増加」でなく、「出現」の意味になる。「魚があがる」も同様に「漁獲」の意味が強調されていることから、ここに含まれると考えられる。「出現」に属する「さがる」の用例は見出されなかった。

- (22) あがる：動画がニコニコにあがる サイト／ネットに
- (23) あがる：煙／火の手／炎／水死体が
- (24) あがる：歓声／悲鳴／叫び声／笑い声／銃声／叫び／音が
- (25) あがる：声／要望が
- (26) あがる：話／名／名前／報告／名声／問題／候補／例／犯人／【人名】／情報が
- (27) あがる：収益／利益／業績／売り上げ／実績／収入／魚が
さがる：収入／収益／利益／業績／売り上げ／実績が

4.2.6. 完了

「完了」に属する《完了状態は上、完了前の状態は下》では、(28)のように「あがる」が「終了」を示すものの場合、逆の状態、即ち「終了前の状態」に戻ることはあまり起こらず、それを「さがる」で表すこともない。例えば、雨が再び降り出すことは「雨がさがる」とは言わない。(29)のように「あがる」が「機能停止」を表す場合もその逆は「正常な機能の状態への回復」であり、起こりえなくはないが「さがる」では表せない。(30)のように「あがる」が「完成」を示す用法では、その逆、即ち一旦完成したものがそうでなくなることは通常起こりえない。(30)のうち、「(フライや天ぷらの)完成」を表す用法では、完成する際に浮いていくことや、油から取り出す「油の中から上へ」の上方移動も「あがる」が用いられる動機づけとして作用している可能性がある。その逆、即ち未完成状態に戻ることは通常ないことから「さがる」の用法はない。

- (28) あがる：雨／梅雨が
 (29) あがる：息／バッテリーが
 (30) あがる：写真／原稿／ネガ／トンカツが

4.2.7. 空間的用法

ここではプロトタイプ義の「空間」ドメイン内部の意味拡張についても見ておく。その結果、用法の一部で使用の非対称性が見られた。

「家屋」は(31)のような「家や部屋の中に入る」ことを意味する。日本の家屋は家の中が地面より高く、入室時に上下移動を伴うことから、上方移動で入室を表すメトニミー的な意味拡張の例である。しかしその逆、即ち家や部屋から出るとは、下への移動が伴うことがあっても、「さがる」の使用は慣習化しなかった(森田(1989)の「宿にさがる」は空間的下方移動ではなく、「上位者」の家から「自己(下位者)」の家への位置移動を表すため「支配」の用例である)。「食卓」は(32)のような食卓に料理が出される用法で、食卓は高いところにあることから「あがる」が用いられたメトニミー的用法であろうが、同時に目上の存在(客)に対する待遇(「支配」の社会的等級<待遇>)の意味も含まれると思われる。この用法では、逆の場合は「さげられる」が用いられることはあっても、「さがる」は使いにくい。「水陸」は(33)のように水中から水上・陸上への上方移動に特化した用法(シネクドキ)であろう。その逆、即ち水中に入ることを「さがる」という語で表すことは慣習化されなかった。また「水死体があがる」は水上への移動ではあるものの、「発見」の意味が強く、上述の「視覚的出現」に含めた。「魚が」も同様で、水上への移動ではあるものの、「漁獲」の意味が強調されており「利益出現」に含めた。「活動空間」は(34)のような用法で、元々各活動場所が他の場所に比べ高い所にあることが「あがる」が用いられる動機づけであろうが、その活動場所を公的場所としてとらえ、そこに現れ、役割を果たしているという意味も付加している。つまり「出現」の意味も備えており、メトニミー的拡張である。その逆、即ち「役割を終え、公的な高い場所からそうでない低い場所へ移動すること」は通常、「あが」った後に起きる移動であることから下降移動を伴い、かつ「さがる」を用いることができる。「地球」は(35)のように、北半球における北方移動を表している。一般的に地図上では北が上であるためである。北半球の場合、「台風」は通常「南下」しないので、「さがる」は使われない。しかし「梅雨前線」など、「南下」しうる場合には「さがる」が用いられる。「前後」は(36)のように、後方に水平移動することを「さがる」で表すが、前方移動は「出る」で表し前方移動を「あがる」で表せない。この非対称性は長嶋(1983)でも触れられている。「攻撃空間」は「前後」と似ているが、(37)のように、戦争・競技などの攻撃的空間における前線への移動を「あがる」で、後方への移動を「さがる」で表している。「地球」「前後」「攻撃空間」は同じ空間的用法であるが、空間の上下が主観的なものとなっており、メタファー的拡張であると考えられる。その結果、空間ではプロトタイプ義を含めて8種類となった。

- (31) あがる：客が 家／縁側／居間／室内に
 (32) あがる：食卓に
 (33) あがる：ウミガメ／ボート／兵が 岸／島に、風呂／海からあがる
 (34) あがる：マウンド／リング／土俵／教壇に
 さがる：スタッフ／メンバー／亭主が ベンチ／リングサイド／土俵下に
 (35) あがる：緯度／台風が(北に) さがる：前線が
 (36) さがる：人垣が
 (37) あがる：最前線／ボランチが(サイドを)
 さがる：ガード／ボランチ／ラインが

「あがる・さがる」の意味拡張とその非対称性

以上をまとめたものが表2である。但し各カテゴリ間の境界はファジーであり、複数のカテゴリにまたがるものも存在しうる。

表2 「あがる・さがる」の意味拡張

範疇	下位範疇	起点>目標	「あがる」例文	「さがる」例文
空間	空間		煙/頭/花火/手/幕/水位/額/あご/右手/肩/子供/彼/息子が	頭/水位/脛/札/肘/カーテン/位置/右肩/目尻/機首が
	家屋	上>家の中	客が, 家/縁側/居間/室内に	—
	食卓	上>食卓上	食卓に	—
	水陸	上>陸	水死体/魚/ウミガメ/ボート/兵が, 岸/島に, 風呂/海から	—
	活動場所	上>活動場所	マウンド/リング/土俵/教壇に	スタッフ/メンバー/亭主が, ベンチに
	地球	上>北	緯度/台風が, 北に	前線が
	前後	上>前	—	人垣が
	攻撃空間	上>前線	最前線/ボランチが, サイドを	ガード/ボランチ/ラインが
出現		上>視覚的	煙/火の手/炎/水死体が	—
		上>公的	動画が, ネット/サイトに	—
		上>聴覚的	歓声/悲鳴/叫び声/笑い声/銃声/叫び/音が	—
		上>意見出現	声/要望が	—
		上>情報出現	話/名/名前/報告/名声/候補/例/犯人/情報が	—
		上>利益出現	収益/利益/業績/売り上げ/実績/収入/魚が	—
時間	上>早	—	時代が	
数量	上>多	気温/湿度/値/値段/率/価格/株価/血圧/体温/金利/数/量/収益/利益/業績/売り上げ/実績/収入/音/語尾/トーンが	気温/温度/熱/率/価格/血圧/値/値段/株価/金利/収入/収益/利益/業績/売り上げ/実績/音/声/トーンが	
評価		上>良	効果/成果/成績/効率/価値/評価/実効/ランキング/運/知名度/人気/相場/質/待遇/格/品/順位/バージョンが	価値/成績/評価/ランク/格/能率/人気/値打ち/評判/質/品位が
		上>健康	コンディションが	調子/代謝/免疫が
		上>意識	意識が	—
		上>楽	テンション/ボルテージ/気分/意気/士気が	テンション/モチベーション/意欲が
		上>感情	試験場/人前で	—
完了		上>終了	雨/梅雨が	—
		上>機能停止	息/バッテリーが	—
		上>完成	写真/原稿/ネガ/トンカツが	—
支配	上>社会的等級高	地位/学年/クラス/グレード/ステータス/ポジションが, 学校/中学/年長/軍/一軍/座敷/お迎え/屋敷/御所に, アイスクリームを	地位/序列/地位/メイド/執事/女中が	

4.3. 研究課題2

4.3.1. 使用に非対称性が見られるのはどのような部分か

空間的用法では「あがる」は「前後」、「さがる」は「家屋」「食卓」「水陸」で用例が存在しなかった。空間以外の用法では「あがる」では「時間」、「さがる」では「出現」「完了」で用例が存在しなかった^{注1}。

4.3.2. 使用に非対称性が見られるのはなぜか

「あがる」「さがる」両方に用例が見出されたのは、「数量」「支配」、及び「空間」「評価」など、相対的な数値で表しうるもの、または移動、変化が両方向に起こりうるもので、「空間」に見られるような「移動」を除けば、数値や等級、評価、変化が増加に向かうものは「あがる」、減少に向かうものは「さがる」で表されることから、使用は対称的になる。

一方、非対称なもののうち、「あがる」のみが見られる12種類の上下メタファーは、「空間」では「家屋」「食卓」「水陸」、そして「出現」「完了」の全てであった。「家屋」「食卓」「水陸」では、柴田他(1976: 16)も述べているように、空間的上方移動の最終局面が際立ち、「出現」「顕在化」の意味を伴っている。従ってこれらの逆は空間的下方移動の最終局面が際立ち、「消滅」「非顕在化」を表すものとなるが、柴田他(1976: 27-29)が述べるように、「さがる」は「基点が焦点となり、そこからの移動」を示し、最終局面に焦点は当たらないことから「さがる」以外の動詞(「家屋」では「出る」、「食卓」では「片付ける」「下げられる」、水陸では「入る」など)を用いる必要があり対称性が崩れる。さらに使用に対称性が見られた「空間」の用法でも人が主語になる場合には使用に非対称が見られ、「さがる」は用いられず、「おりる」が用いられる。これは人の上方移動には「あがる」「のぼる」が用いられるのに対し、下方移動には「くだる」「おりる」が用いられ、「さがる」は用いられにくいことが原因であろう。

一方、「空間」用法の「風呂からあがる」では上方移動の最終局面が際立ち、「完了」の意味を表している。この用例のように「完了」の意味を表す場合には逆はあまり起こらず、「さがる」は用いられにくい。

次に非空間的用法では、「あがる」が最終局面に焦点が当てられ「顕在化」する「出現」「完了」で「あがる」のみが見られている。「出現」では逆の「非顕在化」「消滅」は起こりえても、やはり最終局面に焦点が当てられるため、「さがる」以外の動詞(例えば「視覚的出現」では「火の手がおさまる」、^{注2}「聴覚的出現」では「歓声(鳴り)やむ」など)が用いられ、使用の非対称が生じる。また「完了」では「機能停止」以外は逆の変化は起こりえないために、変化の一方方向性故に使用の非対称性が生じ、また「機能停止」では逆は起こりうるが最終局面に焦点が当てられるために、逆は「さがる」ではなく別の動詞が用いられる。

また、「支配」のうち「進級・進学」は「降年・降学」は通常起こらず、一方向的な変化であるために「さがる」が用いられない。また「食べる」の尊敬語「あがる」のように、対応する尊敬語が存在しない場合もある。

一方、「さがる」のみに見られる上下メタファーは「空間」における「前後」の《前方は上、後方は下》、「時間」の《早い時間は上、遅い時間は下》であった。「前後」の「人垣がさがる」で「さがる」が用いられるのは、「問題となっているある領域から外れる」意味を表すには「基点からの逸脱」を表す「さがる」を用いるのがふさわしいと考えられるためであろう。しかしこの逆の動作を「あがる」では表しにくいのは「あがる」を用いるとどうしても空間的上方への移動が想起されてしまうためであり、また「前に出る」とした方が「前方にある領域に身を乗り出す」という意味を表すことができるからであろう。また「時間」は過去から現在への一方向的、不可逆的な移動であり「さがる」のみが用いられるのであろう。あえて時代の流れに逆行しようとするれば、「あがる」でなく、流れに逆行する坂を登るような困難な上昇を含蓄す

る「遡る」が用いられるが、これは主観的な「視点」の移動であり「時間」の移動ではない。

5. まとめ

以上、「あがる・さがる」の意味拡張と「あがる・さがる」の使用の非対称性について考察してきた。その結果、両語は「空間」から「出現」「時間」「数量」「評価」「完了」「支配」へ意味拡張が見られ、使用の非対称性も一部で見られた。

使用の非対称性については、第一に、移動や変化は双方向であるが、それらが別の対で表現される場合、言い換えれば、上下のメタファー拡張は対称的であるが、「あがる・さがる」の使用に非対称性が見られる場合である。これらのうち「出現」「完了」「家屋」「食卓」「水陸」では「あがる」が上方移動の最終局面に注目する用法であり、その逆は「消滅」「非顕在化」を伴う変化であり、下方移動の最終局面に注目することになるが、それは「さがる」では表せず、表そうとすれば別の動詞が用いられる。一方、空間的移動を表す用法では、人が主語になると「あがる」は用いられても「さがる」は用いられず、「おりる」が用いられたり、「前後」では「あがる」ではなく「出る」が用いられたりしていた。

第二に、移動や変化が一方向的で、上下のメタファー拡張自体に非対称性が見られるために、使用の非対称になる場合である。「時間」「進学・進級」「完了」「地球」がそれに該当し「あがる」のみが見られた。

第三に、尊敬語「あがる」のように、対応語が存在しない場合がある。

これまでの先行研究では、両者の使用が非対称であることには気づきながらも、コーパスを用い、網羅的に考察を行うことまではなされておらず、さらに非対称が生じる理由についての考察も十分でなかった。その意味で本研究は日本語の「あがる・さがる」を例に、使用の非対称性とその原因について、細かな分析を加え、整理したことは意義があるであろう。

また「上下メタファー」は言語を超えた普遍性と個別性や、メタファー拡張の非対称性について扱っており、日本語の「あがる・さがる」の意味拡張の普遍性と個別性、さらには「あがる・さがる」の意味拡張の非対称性を体系的に分析する枠組みとして有効であった。この枠組みを用いることで、これまで無秩序に行われることの多かった語の意味拡張の内省分析に対し、有益な枠組みを提供することが期待される。

但し内省分析に対する「方向性のメタファー」の有効性は、今回「あがる・さがる」の場合に限って確認されたにすぎない。今後は「のぼる」「おりる」など、他の「上下メタファー」や、その他の「方向性のメタファー」についても研究を行い、その意味拡張や非対称性の分析について、その有効性を確認していく必要があるだろう。

注

注1 表2では「意識」「感情」で「さがる」が例示されていないが、4.2.3で述べたように実際には例文が存在しており、対称的であるとした。

参考文献

太田真由美 (2008) 「「あがる」と「のぼる」、及び「おりる」「さがる」「くだる」「おちる」の意味分析」『日本

認知言語学会論文集』 8: 66-74.

柴田武・国広哲弥・長嶋善郎・山田進 (1976) 『ことばの意味 I - 辞書に書いてないこと -』 東京: 平凡社.

鐘勇・井上奈良彦 (2013) 「日本語における上下メタファーの体系構成及びその特徴に関する一考察」『言語文化論究』 30: 13-26.

瀬戸賢一 (1995) 『空間のレトリック』 東京: 海鳴社.

瀬戸賢一 (2007) 「第 2 章 メタファーと多義語の記述」『メタファー研究の最前線』 東京: ひつじ書房.

長嶋善郎 (1983a) 「語の意味の構成要素とその具現について」 日本記号学会編 『記号学研究 3 セミオーシス: 文化のモジュール』 53-65, 東京: 北斗出版.

長嶋善郎 (1983b) 「日本語の「上下移動動詞」の意味について」『獨協大学外国語教育研究』 2: 83-94.

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』 東京: 角川書店.

森山新 (2015) 「日本語多義動詞「切る」の意味構造研究: 心理的手法により内省分析を検証する」『認知言語学研究』 1: 138-155.

森山新 (2016) 「上下のメタファーの観点からみた動詞「あがる」の意味構造分析 - 内省分析法の確立をめざして -」『人文科学研究』 12: 231-241.

Lakoff, G., & Johnson, M. (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press. (邦訳) 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 (1986) 『レトリックと人生』 東京: 大修館書店.

Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.

Taylor, John. R. (2003). *Linguistic categorization*. New York: Oxford University Press.

本研究は科学研究費基盤研究(C)「基本多義動詞・形容詞の意味ネットワークとその習得・教育に関する実証的研究」(平成25~27年度、研究代表者: 森山新、課題番号: 25330168) の助成を受けて行われたものである。

Abstract

The asymmetry of the semantic extensions between the Japanese verbs AGARU and SAGARU: Establishing the introspective method from the perspective of “up-down metaphors”

This paper deals with the asymmetry of the semantic extensions of the Japanese basic polysemous verbs AGARU (to go up), and SAGARU (to go down), both of which extend most of their meanings by means of “up-down metaphors”, one of the conceptual metaphors proposed by Lakoff and Johnson (1980).

Sentences in which the verb SAGARU was used were collected from the Japanese Corpus “NINJAL-LWP for BCCW” (<http://nlb.ninjal.ac.jp>), developed by the National Institute for Japanese Language, following Moriyama (2016), which investigated the verb AGARU, the antonym of SAGARU. 4074 sentences were hit, and they were classified by means of up-down metaphors and were analyzed by the same framework using Moriyama’s research.

As a result, instead of there being 11 kinds of symmetrical parts, it was found that there are also 14 kinds of asymmetrical parts between the semantic structures of these verbs. These asymmetries might be derived from three reasons, as described below.

1. Even in instances when movements or changes are dual-directional, they cannot be expressed by the pair of AGARU-SAGARU, but by the other pairs of verbs. When usages of AGARU focus on the final state of upward movement - which are accompanied by the meaning of “appearance” or “actualization” - the opposite movements or changes also focus on the final state of downward movement, where the other verbs should be used instead of SAGARU. Another case is that when a movement is spatial, and the subject of the sentence by which the spatial movement is expressed is a human being, AGARU can be used, but SAGARU cannot be. If you would like to express downward movement, ORIRU (to go down) has to be used rather than SAGARU. Moreover, there is another usage of spatial movement in which DERU (to go out) should be used instead of AGARU.
2. When movements or changes are not dual-directional but mono-directional, AGARU or SAGARU cannot be used, and as a result, asymmetry also occurs in the usage of AGARU-SAGARU.
3. There is a usage of AGARU, which means “to eat”. It does not have the opposite word and another asymmetry occurs in the usage of AGARU-SAGARU.

Some of the previous literature mentioned the asymmetry between these verbs. But, they did not analyze it in enough detail, or sufficiently discuss the reason for the asymmetry.

However, this study explores these points in detail, using two Japanese verbs as an example.

